St Paul's School （中等部）訪問

文化学園大学杉並中学・高等学校　教諭　教務部副部長　粕谷　剛史

１　はじめに

私立学校教員海外研修団は、研修初日となる 2024 年 9 月 4 日の午前、最初の視察先となる St Paul's School を訪問した。閑静な住宅街の中にたたずむ、その広々とした敷地と緑あふれる風景に、子どもたちの笑顔が重なる姿が印象的であった。プログラムとしては、まず来校の挨拶があり、その後スタッフによるツアー形式で校内設備や授業（Year7、Year11）の見学、ICT 専門スタッフから質疑応答も交えた生徒保護者管理システムの講義説明を受けるという流れであった。

校外の広場にて集合写真

２　学校（施設）概要

Brisbane City から北約 30KM の場所にある Bold Hills というサバーブにある共学校。在籍生徒数は約 1,500 名。リーダー育成教育、創造性、イノベーション教育の分野に力をいれており、2018 年度には革新的なカリキュラムデザイン部門を含むオーストラリア教育アワードの 4 部門で入賞。学校創立は 1960 年と比較的新しい学校だが、QLD 州全体で学力は 100 番以内（OP15：83.6%以上）にランクイン。また日本の公立中学及び高校で英語教師として 5 年間働いた経験のあるスタッフが常駐しており、日本だけでなく、アジア、ヨーロッパなど様々な国から生徒を受け入れている国際色豊かな学校。

新しく建設された Innovation Precinct という校舎には、34 を超えるアクティブラーニングスペースがあり、生徒は自由に利用をすることが可能。授業の前、昼休み、放課後などに Group ワークや課題へ取り組む生徒たちが集まり、意見交換、ディスカッションなど実施。

生徒は全員（中等部以上）がパソコンをベースにして授業が進むだけでなく、すべての授業で課題の提出はスチューデントポータルを利用。スチューデントポータルに教科書も PDF 化されて格納されており、教員もポータルを利用して課題の指示、補足プリントなどの配布、課題の確認、学校-保護者のコミュニケーションも管理。コロナ以前より Prep-Level の生徒（5 歳）

スチューデントポータルの説明を受ける

が Coding 関連の授業に取り組んでいる。最近では Prep から Coding 関連授業（高度なものではなくあくまで体験的な学習やアクティビティー）に取り組む学校は公立/私立とも増えているが、その先駆けとなった学校。

３　教育環境（学校・生徒の様子）

敷地内に緑が多いことがまずもって印象的であった。また、同じく敷地内に構えられたチャペルなどから感じられる荘厳な雰囲気がキャンパス全体に広がり、落ち着いた教育環境の下、授業を受けている様子が見られた。

校舎内（教室）には、最新の ICT 環境が整い、家庭科などの実技教室にも調理の様子を撮影するためのカメラや、生徒が教員による示範を確認するための大型スクリーンが設置され、授業実践に即した形の実装がなされていた。また、足元と壁面全てに投影されるプロジェクションマッピングゾーンがあり、聞けばそこに投影される風景のデザインは、「感性を刺激する空間」「癒しを提供する空間」となるよう、生徒自らが考案したものだという。休憩時間中にすれ違う生徒は、研修団に手を振ったり、（おそらくは習ったものであろう）日本語で自己紹介をしにきたりと非常にフレンドリーな印象だった。第一印象がそうであったからこそ、授業を見学した際の探究心と向学心に溢れる鋭い眼差しに良い意味でのギャップを感じ、オンとオフのメリハリがとれた生徒達が多いと感じた。

プロジェクションマッピングゾーン

４　授業見学（Year-Seven＝日本における中学１年生相当）

以下に記すのは、Year-Seven の社会科の授業の様子である。

いわゆる導入部分であったが、30 名前後の生徒が教員の近くに集まり、注意深く教員の説明に耳を傾ける。本来の座席から離れて、各自が聞きやすい場所に集まっているらしかった。教員が指差す画面上には、古代人の生活の様子が描かれたとおぼしき一枚の絵が映し出されている。その絵をどのような観点から分析をするべきか、丁寧に説明をしている最中であった。

説明の後、各自の座席に戻り、生徒はその絵をひたすらに凝視・観察する。この間、一切の話し声も、雑談もない。静かな時間がこのまま流れるかと思った直後、感じたことや気づいたことについて教員が意見を求めると、途端に生徒たちが挙手をはじめ、凄まじい勢いで発言を始めた。

とめどなく、矢継ぎ早に質問する生徒たちの意欲の高さにも驚かされたが、何

よりの圧巻は教員の対応力だった。手を挙げる全ての生徒の質問に即座に応えつつ、要領を得ずに挙手したであろう生徒へもきちんとフォローを行い、決して否定することなく、むしろ挙手したことを賞賛している様子が見られた。

授業への参加率（engage）を重視するというスタイルは今回の様々な視察先でよく見られた光景だが、その中でも St Paul's school は特に参加率が高かった印象がある。見学したのはわずかな時間ではあったが、おそらくは日ごろから授業に参加しやすい雰囲気作りがなされていることが容易に感じ取れた。信頼関係の濃密さ、気軽に発言しやすい空気が漂う理想的な空間であった。

質問タイムが一通り終わると、その後は各自のタブレット端末にて振り返りを行う（入力する）時間となり、それまで活性化し、にぎやかだった教室内はタイピングの音だけが聞こえる「静の空間」となった。ともすれば ICT の娯楽的利用をしてしまうかもしれない生徒達に対して、教育的利用への専念を促すためには、メリハリのある学習習慣の確立が、必要不可欠だと感じた。

５　おわりに

私が勤務する学校もその中の一つであるが、多くの私立学校において「国際化」が進む中、最新の教育活動の見学をすることのできた今回の研修はたいへん価値のある有意義なものであった。海外渡航経験がなかったことから半ば劣等感に近い課題意識を持ちながら参加した研修だったが、オーストラリアにおいて現在進行形で推進されている ICT 事情について、多くのことを学ばせていただいた。

視察先のそれぞれで教えていただいたことは数えきれないが、特に多く聞かれたのが「宝の持ち腐れにならないようにする」という言葉であった。ICT を有効活用するために、教員が積極的に研修を行い、研修に出向き、教科もキャリアも関係なく、積極的に ICT を利活用する姿勢。その姿勢を見習いつつ、追いつけ追い越せの精神で、引き続き教育活動に邁進したい、と強く強く感じた研修だった。